

文化・芸術

「ton paris」から 「牛乳屋」

1930～33年、色鉛筆・紙
22・2枚×15・1枚 m

茂田井武 (1908～56年)

童画家・茂田井武は、宮沢賢治「セロひきのゴシユ」(1956年)をはじめ、戦後の児童雑誌の装丁や挿絵を通して「夢」の世界を描いた画家で、2026年に没後70年を迎えます。その詩情豊かな筆致から生まれた絵は「物語る絵」とも呼ばれています。

1930年、21歳でシベリア鉄道に乗り、単身パリへ渡った茂田井は、働きながら絵を描き、およそ100点を一冊の画帖「ton paris(トン・パリ)」にまとめました。パリ時代に制作した3冊の画帖のうち、「ton paris」は全ページが良好に残る貴重なものです。その一点である本作は、雪の降るパリで、牛乳を配達する女性を描いたものでしょう。色鉛筆のやわらかな筆致と茂田井独特の色彩感覚により、ほほ笑む女性の姿が温かな雰囲気表現されています。

この作品は、来年1月17日からの企画展でご覧いただけます。
(佐藤)

大川美術館企画展
「没後70年記念 茂田井武「ton paris」とパリの画家たち」から

名画の扉

